

高橋玄洋

いのちあるまで

藍の章

高 橋 玄 洋  
たか はし げん よう

1929年 松江市に生まれる

1954年 早稲田大学日本文学科卒業

劇作を北条秀司氏に師事

現 在 放送作家

著 書 『生きて愛して死んだ』（テレビドラマ社）

現住所 所沢市新所沢団地 97の7

いのちある日を／藍の章

定価 260 円

1965 年 12 月 10 日 第 1 版発行

1965 年 12 月 17 日 第 7 刷発行

著 者 © 高 橋 玄 洋

1965年

発 行 者 竹 村 一

印 刷 所 同興印刷株式会社

製 本 所 株式会社 永井製本所

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台 2 の 9

電 話 東 京 (291) 3 1 3 1 ~ 5 番

振 替 東 京 8 4 1 6 0 番

落丁・乱丁本はおとりかいたします

三一新書 504

いのちある日を

藍の章

高橋玄洋著

三一書房



いのちある日を  
藍の章

夜に向つて 旅人は歩いていた  
長い長い夜であつた

いつかは朝がやつて来ると信じて  
旅人は歩き続けた

跫音は消えても 跫跡は残つた  
そして いつか遠い日

同じこの道を歩いていたらと

たそがれの中に思い出し

旅人は今日も襟を正して歩きつづける  
ひたすらに

ただひたすらに

——いのちある日を

## 第一章

### I

北郷家の三男である信和が生まれた日の晩、当主の信俊は、珍しく悪酔した。小作の富三が祝いに来て、盃を頂戴しているとき、何が原因だったのか、他の者には判らなかったが、信俊はいきなり盃を投げ捨てると、立ち上った。

「も、もう一度いってみろ」

というなり、物凄しい形相で、床の間に飾ってあった太刀を取ると、それを引き抜いて、振り上げた。

そればかりか、恐怖のため転がるように逃げる富三を追って、台所まで出て来た。

さいわい、先代から仕えている忠義者の作男の国造が、必死になって後から抱き止めたので、無事にすんだが、信俊が酒に負けるなど、はじめてのことであった。

祝いに集まっていた小作たちは、台所の隅で震え上りながら、それを見ていた。当の富三は何を聞かれても、口もきけないほどであった。

「やっぱり、お照さんの血が流れとるんじゃ」

と、ささやく者もあった。

信俊の妹の照子は、若いころ、恋人と無理矢理に別れさせられてから、気が狂っていた。

そのお照は、普段は閉じこめられている奥座敷から抜け出して来て、ひょこひょここと祝宴の場にあられ、

「……可哀想に、苦勞するよ。……あの子は苦勞するよ」

と、あらぬことを口ばした。

「何をいうの。お照……縁起でもない」

あわてた祖母ののじが、無理に奥へ引っ張っていったが、引っ張って行かれないが、照子は、

「……可哀想に苦勞するよ」

と、そればかりを繰返していたという。

翌朝、そのことを、手伝いに来ている妹の雪乃から聞いたとき、せいは一瞬、顔色の蒼ざめるおもいがした。

せいはまだ、暗い産室で休んでいた。

その産室は、昔、彰義隊の残党をかくまったという壁の中の密室で、一晚のうちに、出入り

の大工と左官をよんで、納戸の軒下に、もう一つの壁をつき上げさせてこしらえたものだった。外から見れば納戸の壁であるし、内側からみても一つの壁に見えるような仕組になっていた。この家まで落ちのびて来た、若い八人の侍は、そこに二月ばかりかくまわれていたという。が、やがて官軍の詮議がきびしくなると、この家に迷惑がかかるのを恐れて、頭領格の森田十九郎が、進んで自首して出た。

十九郎は、切腹させられたが、彼の命乞いで、他の侍たちは助かった。一人は傷が重くなつて亡くなり、五人はそれぞれ国へ帰ったが、あとの一人はこの家に残った。

その侍が、のじと結婚して養子に入つた先代である——という曰くつきの部屋であり、のじのときから、お産に使われる習慣になつていた。

十年振りのお産であるせい、この部屋で、まる一昼夜苦しんだ。

この家とは関わりの深い大貫医師も、勿論早くからつめかけていたが、陣痛微弱のため、夜中に使いの者が注射をとり、町へ行ったり、看護婦ももう一人呼びよせられたりして、せいの体のことが氣遣われた。

一時は、自分も先妻のつぎのように、お産で死ぬのではないかと思われたくらいである。が、産れたのは、丸々と太った丈夫そうな男の子で、しかもその日は、丁度お目出たい明治節の日にもあたっていて、せいもほつとしていたところであつた。

「義兄さんも大変なのよ、疲れているんですよ。毎日ああ責めたてられたんじゃない。……そ

れに北郷家も昔ほどではないし……時代が悪いのね」

雪乃は姉を慰めるように言った。

たしかに時代も悪かったのである。

信和が生れた昭和五年という年は、日本は不景気のどん底だった。

大震災の復興に、その実力を世界に示したかに見えたが、そのしわ寄せは金融恐慌となって吹き荒れ、中小企業の倒産が相ついだ。無類の就職難の時代でもあった。一家心中や人身売買が新聞の社会面を賑わし、不景気による生活の不安は、左翼思想の擡頭となって、官憲の弾圧をまねいた。思想的にも動揺のはげしかった時代である。

殊に、農村の疲弊は甚だしかった。

昭和五年の五月に、一、一〇〇円であった生糸相場は、わずか一ヵ月後の六月に、七九五円になり、繭価はいっそう暴落して、五年の九月には、前年同月の三分の一にまで下落していた。養蚕を主体にしていたこの地方の農家や、製糸業者が深刻な打撃を受けたのは、いうまでもないことである。

連日、小作人の代表者や、製糸業者が北郷家へつめかけて、険悪な空気に満ちていた。

小作人たちは、繭を収めるまでの期間、諸般のかかりや、生活費など北郷家から面倒をみてもらう。勿論、高利であって、繭の出来高からそれを差引くのであるが、今年のように繭価が暴落しては、借金の返せるはずはなかった。翌年の春の繭を担保に入れても、まだ明日の生計

の日処は立たない。この上は借金の引延ばしをねがうより他に、生きる道はないのである。

製糸業者もまた、生糸相場の下落で、繭の代金の支払いがとどこおり、北郷家の手によって、借金のかたに機械を差押えられているところが多かった。

ここで、この地方の産業と、北郷家の関係に少し触れておくと、すでに江戸時代より秩父の絹織物は、秩父銘仙として全国的にも有名で、商いも盛んであった。

山国で、お米が殆んど取れなかったこの地方の農家では、絹織物が主な現金収入の道であった。

そのころは、それぞれの農家で、蚕をかい、糸を繰り、機を織って、反物にして売っていたのであるが、幕末から明治にかけて、横浜港が開港し、生糸の輸出がはじまると、製糸業が独立した。農家は繭をそのまま商品として製糸業者に売り渡すようになって、養蚕と製糸の分業がはじまった。また、織物工場も独立するようになった。

このような時代の流れに、いちちやく目をつけたのが、北郷家の先代であった。

もともと北郷家は、この秩父で代々庄屋を務めて来た山持ちであり、地主であった。

先代は財産にものをいわせて、乾繭工場を建てた。繭の出来時に、農家から安く買いあつめ、それを乾燥して倉に蔵っておき、秋になって繭の値上りを待ち、製糸業者に売り渡すのである。北郷家はこの方法によって、たちまち産をなした。

先代は更に織物工場の方へも手を伸ばし、金融面で多くの業者の面倒をみ、この地方の産業

に勢力をほしいままにしていた。

しかし、不景気の波は、北郷家にも押しよせていたのである。

信俊は、先代の手の広げすぎた事業の縮小をはかった。織物工場や製糸業から手を引こうと考えていたのである。

すでに北郷家から金融を断ち切られた織物工場は、何軒か破産していた。

「時勢！ それが血も泪もあるという北郷家の回答かい」

殺気立った人々の怒鳴り声が、広い屋敷にひびき渡るときもあった。  
また、

「北郷家が何だ！ 死んでもこんな男に頭なんか下げるものか」  
と捨てぜりふを残して帰って行く者もあった。

しかし、昨夜、信俊が悪酔した原因は、そのことだけではないのを、せいは感じていた。

「お義兄さん、ここへいらっしゃった？」

雪乃に訊かれて、せいは弱々しい微笑を浮かべながら首を振った。

「男の人って暢気ね、また大貫先生と碁でもうっているんだろ。姉さんがあんなに苦しいおもしろいんだもの、ねぎらいの一言ぐらい言いに来たっていいとおもうわ」

「けがれているとおもっているんでしょう」

「それだけかしら？」

信俊はわざとこの部屋へ来るのを、さけているようでもあった。

しかし、姉の疲れた顔を見ると、雪乃もそれ以上は言えないで、せいの氣を引き立てるように、子供たちの話をはじめた。

「とみ子ちゃんったら、ほんとにお母さんおもしろいのね。赤ちゃんが産まれるまで、御飯も喉へ通らないのよ」

「そう、あの子は氣が優しすぎるのかもしれない……」

「でも女の子はあれくらいの方が、かえってしあわせになるのかもしれないわね」

とみ子は素直で優しい子だった。それだけにこの家でも影が薄い存在だった。今年、小学校の四年になるとみ子と、その下の信正とがせいの産んだ子供であった。

「すみさんったら、相変らずなのよ。みんなが心配しているときでも、案ずるより産むがやすしなんて言って、けろりとしているし」

雪乃は、思い出しても可笑しいという風に、やっと笑いをこらえながら言った。

「赤ちゃんが産まれたときと、お祝いだといって逆立ちなんかしてみせて、おばあちゃまに叱られると、おばあちゃまの血が流れているんだから仕方がないでしょうと、あべこべにおばあちゃまをやっつけているの」

長女のすみは、先妻の子で女学校の五年になっていたが、雪乃の話の通り、とかく変わった振

舞いが多かった。

女だてらに自転車にのって、颯爽と学校へ通いはじめて、人々の目を驚かしたのもすみであった。何事につけても勇ましく、人生も一種の戦いと心得ているようなところがあつた。それだけにまた、行末が思いやられて、せいはいはらはらしていた。

「すみさんに言わせると、この家の女は血の気が多すぎるんですって」

と雪乃は言つたが、そうかもしれない。祖母ののじにしてもこの部屋にかくまわれていた侍の中の一人を好きになり、人々の反対を押し切つて、結婚したというし、それがかなわぬときは、照子のように気が狂つた。すみの場合は、それがどういう形であらわれてくるのだろうか。残された先妻の二人の子供、長男の信之とすみ子を、自分の手で立派に育てて見せる、せいはその決心して、この家に入ったのだった。賢夫人の誉れの高かつた先妻のつぎに負けるまいと、精一ぱいに張り合うような氣持だった。

「信之さんは？」

訊かれて雪乃は、ちょっとためらうような間をおいて、こたえた。

「お二階で本をよんでいるんじゃないかしら？」

それからあわてて話題を変えようとした。

「女があんな苦しみに耐えられるのは、愛している人の子供だからでしょうね」

雪乃は話題を変えたつもりであつたが、そう言つた途端、不意に熱いものがこみ上げて来て、

思わず深い溜息となった。

「姉ちゃん、あんたに悪いことをしたのかしら？」

「どうして？」

「信之さんのこと。……ごめんなさいね、あんたたちの気持、わからないことはなかったんだけど……」

たとえ義理とはいえ、叔母、甥の間柄である。どうにもならないことだったのだ。せいや信俊のすすめで、雪乃の結婚の相手はきまっていた。

「あんたは、倅せになってね」

せいにいえるのは、それだけだった。

「あ、そうだわ。お書斎の方へもお茶を持って行かなくちゃ」

雪乃はそう言って立ち上ると、泪をかくすようにいそいで部屋を出て行った。

残されたせいは、ぐったりと疲れ切って目を閉じた。少しねむろうとおもうのだが、なかなかねむれなかった。雪乃は倅せになってくれるだろうか、それから父親の信俊にことごとく反撥している信之のこと、更には、新しく生まれた子供の将来のこと。思いめぐらすと、それからそれへと不安が湧いてくるのであった。

女にとって、最初のつまずきは、どれほど深い意味を持つものか、重い重荷となってくるものか。せいは最初の晩、信俊に責められたときのことを、まざまざと思い出していた。あれは、

もう十年も前のことで、すんでしまったことのように思っていたが、やはり長く尾を引いて残っていたのである。

結婚する前、せいには好きな人があった。男が死んでいく前に、一度体を許した関係であるが、そのために今も自分の身の潔白が疑われているとは信じられないが、信俊の態度には、何かせいを不安にさせるものがあった。

雪乃がお茶を持って行ったとき、やはり書齋では、信俊と医師の大貫が碁盤を囲んでいた。

大貫は、北郷家の後押しで、県会議員にも出ており、この家には自由に入りしめていた。信俊の相談相手でもあった。古武士のように痩せ型で筋肉質の信俊にくらべて、大貫はでっぴりと肥って贅祿があつて、何事にも如才なかつた。

「あなたも大変でしたでしょう」

大貫は、雪乃の労をねぎらうと、旨そうにお茶を飲んだ。彼の方が形勢が有利なのか、余裕綽々で上機嫌であつた。

「もうすぐですな」

大貫は、雪乃の方をかえりみていった。結婚のことをいったのである。雪乃は黙つてうつむいた。

碁石を握って、盤面をにらんでいた信俊も顔を上げて、満足そうに口を添えた。

「仁科という陸軍中尉で、なかなか有望な男です」

「私はまた、信之君かと思いましたよ」

「馬鹿な！ それに、あ奴なんかまだまだ……」

信俊はまた不機嫌になって、吐き出すようにいった。

雪乃は、そこからも逃れるようなおもいで部屋を出た。

雪乃が出て行くと、信俊と大貫は、さきほどの話の続きに返った。

「こういう例は多いのかね」

信俊は、白い石をパチリと置きながら訊く。

「何がです？」

大貫はとぼけてみせた。

「いや、十年振りに生まれるなんていうのは……」

「さあ、それはやはり原因あつての結果でしょうな」

二人の目がお互いを探り合った。

「……ご自分が一番お判りのことでしょう」

「どういう意味だね、それは」

「いやあ、別に……」

「赤ん坊の顔なんてものは、しわだらけで、ちっとも可愛くないな」